

# 子どもの「やってみたい」を引き出す支援とは？

認定NPO法人カタリバ コラボ・スクール大槌臨学舎

菅野 祐太

## はじめに

「主体性を持った子に育ててほしい」そう願わない保護者の方々はいないのではないのでしょうか。ではその「主体性を引き出す」ためにはどのような支援をすべきか考えてみませんか。

カタリバでは20年以上、中高生の学ぶ意欲を引き出すための方法について様々な取り組みを行ってきました。2011年12月には東日本大震災津波で被害を受けた本県大槌町で子どもたちの学習場所を提供し始めました。当時町内の多くの生徒が住んでいた仮設住宅は狭く、子どもたちが安心して学習が出来ない状況でした。そのため、コラボ・スクール大槌臨学舎を開設したところ、初年度は町内の子どもたちの約7割が通ってきました。今年の12月で大槌町での取り組みがはじまってから10年が経過しますが、その間、子どもたちの学ぶ意欲が

高まる瞬間を幾度となく見てくださいました。

また今ではコロナ禍の中で不登校となった子どもたちにもオンラインで学習の機会を届ける取り組みも行っています。そのような活動を行う中で得たいくつかの視点を提示できればと思います。

## カタリバが大事にする2つの視点

今回はカタリバが創業時から大切にしてきた2つの視点を取り上げます。

1つ目は「ナナメの関係」です。子どもを中心としたとき、タテの関係は保護者や先生になります。子どもたちにとって保護者や先生は間違っていることを指摘してくれ、正しいことを教えてくれる頼れる存在です。でも自分が悩んでいる心の内を話す時には、タテの関係ではなかなか話しづらいかもかもしれません。次にヨコの関係です。ヨコ

の関係は例えば友達です。友達とは普段から接していて、真面目でいることの照れくささから、本音で進路のこと、家族のことなどを相談しようとした時には子どもなりにちよつとためらってしまうかもしれません。

そんな時に役割を期待したいのが「ナナメの関係」です。ナナメの関係は、近所のお兄さんお姉さん、地域の方など、日常的に会話をする機会が少ないかもしれないですが、ふとしたときにアドバイスをくれるような関係です。時に自分を受け止めてくれ、時に何の利害もないのにアドバイスをくれる人がいることが、その子にとっての重要な心の居場所となり、「やってみようかな」という気持ちにつながる

ことがあります。もちろん、それはタテとヨコの関係を補強するものです。タテ・ナナメ・ヨコで複数の線が結びついているからこそ、子どもたちの

ちの多様な状況に対応ができます。

2つ目は「憧れの人」をつくることです。憧れは学ぶ意欲につながります。「この人すごいなあ」と思う人の近くにいると、それが刺激になり、その人の真似をしたりすること、とで、「どんな」学ぼう・やってみよう」という意欲が育まれます。子どもたちにとっての憧れの存在が誰になるのかは、大人たちにも予想が付きません。歴史上の偉人・担任の先生・保護者や近所の人の場合もあるでしょう。もちろん成功した人に憧れる場合もありますが、失敗からのように学んだのかを教訓として語ることができる人が憧れの人となる場合もあります。

主体性はもちろん子ども本人が持つものです。しかし、子どもと周囲の環境との良質なつながりが主体的に学ぶ意欲を育みます。コロナ禍や災害は人とのつながりを容赦なく分断します。ですが、そうした時にこそ、子どもたちには良質なつながりを確保する必要があります。そのためには、子どもに関わる大人一人ひとりが子どもとのつながり

## 終わりに

の当事者になること、また「ナナメの関係」や「憧れの人」とつなぐ支援を行うことが求められます。カタリバも困難な環境に置かれた子どもたちに対し、そうしたつながりをつくることのできるよう引き続き取り組みを行ってまいります。

## プロフィール



**菅野 祐太**  
(かんの ゆうた)  
早大卒。カタリバ職員、大槌町教育専門官。文科省や内閣府、本県社会教育委員会などを務める。



憧れをつくるカタリバの様子